

フェドシューク
古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科(その3)

Ф. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
阿部 昌子
神田 良平

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章に続いて、今回は2章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。2章は9節からなるが、3～5節を阿部、6～7節を神田、残りを鈴木が分担した。

注についても前回同様である。訳注は[]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第2章

血族、姻戚、呼びかけ

Родство, свойство, обращение

1 節

血縁・姻戚関係用語

Термины родства и свойства

「ママ мама」と「パパ папа」は幼児の片言隻句に取って代わる初めての、そしてもっとも必要かつ最愛の言葉である。続いて幼児語の中に入ってくるのは、「婆 баба(祖母 бабушка)」と「爺 деда(祖父 дедушка)」であり、もう少し成長すると「息子 сын」、「娘 дочь」、「兄弟 брат」、「姉妹 сестра」、「おじ дядя」、「おば тётя」といった概念も獲得してゆく。これらは、血縁による人間関係を意味する言葉で、学術的には〈血縁関係用語 термины родства〉と呼ばれ、誰もが知っている。ロシア語ではまたこうした血縁関係用語とともに、婚姻の結果として生じる人間関係——すなわち夫妻の一方と相手方の親戚一同との関係、それに夫婦双方の親戚一同同士の関係——を表す〈姻戚関係用語 термины свойства〉もいまだ健在である。今日では、かつては広く人口に膾炙し、文学の世界でも常時出会ったこうした用語の多くが、誰にでも理解されているわけではない。次に姻戚関係用語の一覧表を提示してみよう。これらの用語は、ロシア文学に登場する人物たちがどんな縁故関係にあるのかを明らかにするために重要なのである。

| | 名 称 | 意 味 |
|----|-----------------------|--|
| 1 | スヴォーコルсвёкор | 夫の父親(=舅) |
| 2 | スヴェクローフィсвекрѡвь | 夫の母親(=姑) |
| 3 | テースチтестъ | 妻の父親(=舅) |
| 4 | チョーシチャтёша | 妻の母親(=姑) |
| 5 | ジャーチзять | ① 娘の夫(=婿) ② 姉妹の夫(=義兄/義弟) |
| 6 | スノハーсноха | 父親から見た息子の妻、あるいはまれに母親から見た息子の妻(=嫁) |
| 7 | ネヴェーストканевёстка | ① 兄弟の妻(=兄嫁/弟嫁) ② 母親から見た息子の妻、あるいはまれに父親から見た息子の妻(=嫁) ③ 兄弟の妻から見た他の兄弟の妻(=兄嫁/弟嫁) |
| 8 | シューリンшурин | 妻の兄弟(=義兄/義弟) |
| 9 | デーヴェリдѣверъ | 夫の兄弟(=義兄/義弟) |
| 10 | ゾローフказолѡвка | 夫の姉妹(=義姉/義妹) |
| 11 | スヴォヤーチェニццасвоѣченица | 妻の姉妹(=義姉/義妹) |
| 12 | スヴォякъсвоѣк | 妻の姉妹の夫(=義兄/義弟) |
| 13 | スヴァ́ртсват | ① 息子の妻の父親(=嫁の父) ② 娘の夫の父親(=婿の父) |
| 14 | スВа́рча́сва́тъя | ① 息子の妻の母親(=嫁の母) ② 娘の夫の母親(=婿の母) |

こうした用語を記憶するのにさほどの苦労はないように思えるが、現代の若者でこれら14の用語を正確に説明できる人など多くはあるまい。これらの用語のいくつかは忘れ去られ、葬り去られようとしているのだ。ところが我々の祖先にとって、これらの用語は生きていたのであり、一般常識的な言葉だったのである。

これらの用語が忘却されようとしている原因は様々である。原因の一つは、かつての家父長的な時代に比べて親族内の結びつきが弱まってきたということである。もう一つの原因は、用語のいくつかはその意味が曖昧化し、不明確に

なってしまったことである。したがってこれらの用語が現代の法律用語として認められていないのも偶然ではない。

たとえば「ジャーチ зять」という語を取り上げてみよう。現代においてこの語は何よりもまず「娘の夫(=婿)」という意味で使われており、「姉妹の夫(=義兄/義弟)」という意味は後景に退いてしまっている。言語は混乱の元凶となる多義性が嫌いなのである。

プッシュキンの悲劇『ボリス・ゴドゥノフ Борис Годунов』では、シューイスキーが憎悪を込めて皇帝ボリスについて語る――

昨日の奴隷、タタール人、マリュータの婿
 刑吏の婿、自らの性根もまた刑吏たる男が
 モノマフの王冠と肩書きを纏うのだ……

Вчерашний раб, татарин, зять Малюты,

Зять палача и сам в душе палач.

Возьмёт венец и бармы Мономаха…

【『ボリス・ゴドゥノフ』全23場中の第1場/河出書房新社、『プーシキン全集』
 第3巻、146頁】

ボリス・ゴドゥノフはマリュータに対してどんな存在なのだろうか？ マリュータ自身の娘の夫、あるいは姉妹の夫に当たるのだろうか？ 悲劇のテキストはそのことについて何も教えてはくれない。我々は歴史的資料を紐解いて初めて、ボリスの妻がマリュータの娘だったことを知るのである。

別な例を引いてみよう。ゴーゴリの『死せる魂 Мёртвые души』では、ノズドリョーフに同行しているのは変わり者の「ジャーチ зять」ミジューエフであるが、彼は何者であろうか？ ノズドリョーフの「娘の夫」であろうか、それともノズドリョーフの「姉妹の夫」であろうか？ 35歳というノズドリョーフの年齢から判断すれば、彼に結婚できるほど大きな娘がいるとは考えにくい。したがってミジューエフがノズドリョーフの姉妹の夫であることは疑いない。このことは小説を読み進むことによって裏づけられる。小説を読み進むと我々は、ノズドリョーフの今は亡き妻が彼に乳母の世話の必要な幼児を二

人残したことを知るからである。

ちなみに、「ゾローフカ золовка」の夫、つまり「夫の姉妹」の夫もまた「ジャーチ зять」と呼ばれる。となれば「ジャーチ зять」には「娘の夫」、「姉妹の夫」の他に、「夫の姉妹の夫」という3つ目の意味があることになるわけである。

「スヴァート сват」もまた多義的な語である。若い男性から依頼されてその男性が見初めた女性の両親に結婚の申し込みをする男衆、すなわち仲人もまたこう呼ばれるからである。そうした結婚の仲介を生業としていたのが、〈スヴァーハ сваха〉と呼ばれる女仲人で、我々にはオストロフスキーの喜劇を通じてお馴染みである。この女仲人の典型像はゴーゴリの喜劇『結婚 Женидьба』の中に姿を見せている。しかし「スヴァーハ сваха(女仲人)」と「スヴァーチャ сватья(嫁の母/婿の母)」は、言葉が違うのだから混同することはないにしても、「スヴァート」には注意しなくてはならない。なにしろこちらは一語で「仲人」も「嫁の父」、あるいは「婿の父」も意味するのだから。プーシキンの『ルサールカ Русалка』には公爵の結婚をお膳立てする「スヴァート(仲人)」が登場する。またサルトィコフ＝シチェドリンは長編『僻地の旧習 Пошехонская старина』に、「仲人も何人かいるにはいたが、それは男にとって幾分恥ずべき生業と考えられていた/Были и сваты, хотя для мужчин это ремесло считалось несколько зазорным」と書いている[15章「姉の求婚者たち」/未来社、『シチェドリン選集』第4巻、351頁]。

プーシキンは『サルタン王物語 Сказка о царе Султане』の中に難問を残していった。難問とは、そこで腹黒いババリハが「スヴァーチャ・バーバ сватья баба」と呼ばれていることである。物語をさらに読み進むと、彼女はグヴィドン王子の祖母、つまり王妃の母親にあたることが判明するが、だとすれば彼女はいったい誰にとっての「スヴァーチャ(嫁、あるいは婿の母親)」なのであろうか？ 彼女はサルタン王にとっては「チョーシチャ тёща(妻の母)」にあたるが、彼女を「スヴァーチャ」と呼ぶべきはずの王の両親についてはテキスト中一言も触れられていない。それなのにどうしてババリハには

「スヴァーチャ」という呼称がつけられているのか？ この語は、ごくまれにだが、「スヴァーハ(女仲人)」という意味でも使われていたとはいえ、ババリハが結婚の仲介に従事している様子などどこからも窺えないのである。

レフ・トルストイの中編『ハジ・ムウラート Хаджи-Мурат』ではニコライ I 世が、ロシアのみならずヨーロッパの諸事件における自らの役割について得々として考えながら、「シューリン(妻の兄)であるプロシャ王のことを、彼の弱さや愚かさのことを思い出し、しばし頭を横に振った／вспомнил про шурина, прусского короля, и его слабость и глупость и покачал головой」とある。「シューリン шурин(妻の兄弟)」という語の意味を知っていれば、多くのことが明らかになるだろう。ニコライ I 世がプロシャ王フリードリヒ IV 世の妹と結婚したのは歴史的事実であり、かくしてフリードリヒ IV 世はニコライ I 世の「シューリン」となったのである。

『アンナ・カレーニナ Анна Каренина』では、血縁関係および姻戚関係の用語が、つねに登場人物たちの家族関係を規定している。すなわちスチーフ・オブロンスキーはカレーニンにとって「シューリン шурин(妻の兄)」であると同時にシチェルバツキーにとって「ジャーチ зять(娘の夫)」であり、キチーはスチーフにとって「スヴォヤーチェニツア свояченица(妻の妹)」であり、ドリーはアンナにとって「ネヴェーストカ невестка(兄嫁)」であると同時にレーヴィンにとって「スヴォヤーチェニツア(妻の姉)」であり、またスチーフとレーヴィンは互いに「スヴォヤーク свояк(妻の姉妹の夫)」であり、カレーニンはスチーフにとって「ジャーチ(妹の夫)」であり、アンナはドリーにとって「ゾローフка золовка(夫の妹)」等々となっているのである。こんな場合にこそ、先に挙げた一覧表は大いに役立ってくれるのである。

2 節

用語の混交

Смешение терминов

現代だけではなく、昔もまた、とくにフランス語に慣れ切った貴族は、血縁関係用語をよく混同し、その使用に困難を感じていた。レフ・トルストイの喜劇『文明の果実 Плоды просвещения』では、地主夫人トルスタヤがこう言っている——「夫の兄弟は何て言うのでしたでしょう?…… ポー・フレールじゃなくて、ロシア語で…… スヴォーコル(夫の父)じゃないし、他に何とかというのがありますでしょう? こうしたロシア語の呼び名をどうしても覚えられませんの……/Брат моего мужа — как это называется? ...не beau-frère, а по-русски... не свёкор, а ещё как-то? Я никогда не могу запомнить этих русских названий...」。彼女は「デーヴェリ деверь(夫の兄弟)」という語を忘れてしまった(あるいは知らなかった)のである。こうしたデテールを通してトルストイが言わんとしているのは、上流階級が母国語を失念しかけているという事態である。

だが地主夫人トルスタヤにあまりきつい態度をとってはなるまい。ロシア古典文学作品ではそこかしこでしょっちゅう姻戚関係用語が混同されているからであり、またおそらくその混交は偶然ではなく、実生活でもまた起こっていたことだと思われるからである。『知恵の悲しみ Горе от ума』の登場人物一覧では、フレストワがファミウソフの「スヴォヤーチェニツァ свояченица」とされているのに、ファミウソフは彼女に「ネヴェーストウシカ невестушка」、つまり「ネヴェーストカ невестка」と呼びかけている。「ネヴェーストカ」は「兄弟の妻」という意味であるのに対し、「スヴォヤーチェニツァ」は「妻の姉妹」という意味であるにもかかわらずにである! この場合、もしかしたらフランス語が影響しているのかもしれない。フランス語では、ちょうど「デーヴェリ деверь(夫の兄弟)」も「シューリン шури́н(妻の兄弟)」もともに「ポー・フレール beau-frère」という一語で表されるように、「スヴォ

ヤーチェニツツア свояченица (妻の姉妹)」も「ネヴェーストカ невестка (兄弟の妻)」もともに「ベル・ソール belle-soeur」という一語で表現されるからである。

「ネヴェーストカ невестка (兄弟の妻)」と「ゾローフカ золовка (夫の姉妹)」が混同されることもしばしばである。レフ・トルストイの『地主の朝 Утро помещика』では、アリーナが自分の「兄弟の妻」たちを、つまりは「ネヴェーストカ」と呼ぶべき人々を「ゾローフカ」と呼んでいる(11章)。アリーナは田舎の老婆らしいが、その彼女にしてからすでにすべての姻戚関係用語を覚えていないのである！ここではもはやフランス語など何の関係もない。同様の間違いはオストロフスキーの喜劇『賑やかな場所で На бойком месте』にも見られる。そこではアンヌシカがエヴゲーニヤ・ミローノヴナに「ゾローヴシカ золовушка」、つまり「ゾローフカ золовка (夫の姉妹)」と呼びかけているが、エヴゲーニヤは彼女にとって「夫の姉妹」ではなく(アンヌシカに夫はいない)、「兄弟の妻」、すなわち「ネヴェーストка невестка」なのである。

トゥルゲーネフの長編『処女地 Новь』では、県知事がマルケーロフをシピャーギンの「ジャーチ зять (娘の夫／姉妹の夫)」と呼んでいるが[35章]、実際にはマルケーロフはシピャーギンの「妻の兄弟」、つまり「シューリン шури́н」なのである。「ジャーチ」と「シューリン」という二つの用語の取り違えは、クップリーンの『ガーネットのブレスレット Гранатовый бласлет』にも見られる。同じ作家の長編『陸軍士官学校生 Юнкера』では、何の前触れもなしにいきなりこう書かれている——「アレクサンドロフは夏の残りを母親と一緒にシューリンのところで、つまり姉妹ジーナの夫のところで過ごした……/ Александров провёл остаток лета вместе с мамой у своего шурина, мужа сестры Зины...」。 「姉妹の夫」はもちろん「シューリン」ではなく、「ジャーチ」である。

言葉の正確さをことのほか大切にしたプーシキンが『死んだ王女と七人の豪傑の物語 Сказки о мёртвой царевне и семи богатырях』でおこなった訂正は、

非常に示唆に富んでいる。草稿の段階では豪傑たちの長兄が王女に、「なっ
てください、誰か一人の妻に、／他の者たちの優しきゾローフカに。／なにゆえ首
を横に振るのですか？／Одному женою будь,／Прочим ласковой золовкой.／
Что ж качаешь головою?」と懇願しているのだが、清書の段階ではこの個所
が、「なってください、誰か一人の妻に、／他の者たちの優しきセストラ
に。／なにゆえ首を横に振るのですか？／Одному женою будь,／Прочим ласк
овой сестрою.／Что ж качаешь головою?」という具合に訂正されている。
プウシキンはタイミングよく、「ゾローフカ золовка」とは「夫の姉妹」のこ
とであり、王女が兄弟の誰か一人の妻となれば、他の兄弟にとって彼女は「ネ
ヴェーストカ невестка(兄弟の妻)」となるのだということに気づいたのだ。
「セストラ-сестра(姉妹)」という語を「ナズヴァ-наヤ・セストラ-наЗ
ваная сестра(義理の姉妹)」という意味で使用するほうが、同じ物語詩でこれ
以前に「ブラ-теЦ・на-ш・наЗваный братец наш названный(われ
らが義理の兄弟)」という表現が使われていることもあって、詩人にはより望
ましいと思われたのである。

用語を混同するということと、たった今プウシキンの作品において見たよう
な、「ネヴェーストカ(兄弟の妻)」の代わりに「セストラ(姉妹)」を用いる
といった、そもそもの正しい用語をより親しみに溢れた用語によって代替する
ということは、まったくの別問題である。換言すれば、姻戚関係用語を相応の
血縁関係用語によって代替するのは、人間関係の温もりを強調しようという目
的に沿った行為だということである。オストロフスキーの喜劇『身内同士は後
勘定 Свои люди — сочтёмся』のポトハリューギンは、猫をかぶって「テ-
с-тесть(妻の父親)」を「チャー-те-ни-ка тятенька(おとっつあん)」、「チ-
ョ-ш-ч-ч-тёща(妻の母親)」を「マ-е-ни-ка маменька(おっかさん)」と呼んでい
る。またチェーホフの『三姉妹 Три сестры』の教師クウリイギンは、自分の
妻の妹[つまりスヴォヤ-че-ни-ца свояченица]イリーナに「ド-ро-га-я・セ-
с-т-р-а дорогая сестра(親愛なる妹)」と呼びかけている。ネクラ-ソフの『誰
にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』では、マトリ-ョ-на・チ

モフェーエヴナの夫の祖父が、血の繋がらないマトリョーナを優しく「ヴヌウチェニカ внученька(孫娘っこ)」と呼んでいる。こうした現象は現代でも観察できるものである。

しかし古典作家においてさえも見受けられる、姻戚関係用語を使用する際の混乱は、どのように説明したらいいのだろうか？ トゥルゲーネフやレフ・トルストイ、オストロフスキーのようなロシアの生活習慣に通暁した人々が、民衆の俗語を知らなかったとは考え難い。こうした混乱は疑いもなく、日常的な言語運用の反映に他ならない。血縁および姻戚関係用語は様々な方言の中で混じり合い、概念同士の厳密な境界線——たとえば「ネヴェーストカ невестка(兄弟の妻)」と「ゾローフカ золовка(夫の姉妹)」という概念の厳密な境界線——は失われていったのであり、作家たちは自らの作品の中で、「新語の創造者たる民衆 народ-языкотворец」の口から聞き取った言葉をそっくりそのまま伝えようとしたのである。

3 節

宗教的親戚関係

Духовное родство

これは血縁に基づく関係ではなく、間接的な家族関係であり、儀式的な繋がりに基づく関係である。「宗教的親戚関係」は法律によって厳密に定められてもいたし、またロシア革命前はずっと重要な法律概念の一つでもあった。そのことはロシア古典文学にも反映されている。妻と死別した男は、死んだ妻の姉妹とは結婚できなかつたし、未亡人は死んだ夫の兄弟とは結婚できなかつた。また血を分けた兄弟の妻の姉妹とも結婚することができなかつた——そこでも「宗教的親戚関係」が立ちはだかつたからである！ トルストイの中編『青年時代 Юность』の主人公ニコレーニカ・イルテーニエフは、次のように考えている——もし彼自身の思慕する娘の兄であるドミートリーが、ひょっとして彼の妹リュポチカと結婚したがついていたら、いったいどういうこ

とになるのだろうか? 「そうならば、僕か彼のどちらかが結婚できないことになってしまうだろう/Тогда кому-нибудь из нас ведь нельзя бы было жениться」[27章]。こうしてニコレーニカは犠牲的精神を発揮し、ドミートリーと妹リュポチカの幸せを邪魔しないようにと、ドミートリーの妹ワーレニカとの結婚を断念しようとして決意するのである。現代の読者は、今では存在しないこうした法律のどれひとつ、耳にしたこともなければ、理解することもできない。『戦争と平和 Война и мир』を読んで分かるのは、もしアンドレイ・ボルコンスキー(マリアの兄)がナターシャ・ロストワ(ニコライの妹)と結婚したなら、ニコライ・ロストフはマリア・ボルコンスカヤとは結婚できないということである。

トルストイの短編『我が隣人ラヂーロフ Мой сосед Радилов』の劇的葛藤は、テキスト中では一切説明されておらず、現代の読者にとってそれは理解の埒外にある。この葛藤の本質は、妻と死別したラヂーロフと亡くなった妻の妹で未婚のオリガが、お互いに愛し合っているものの、結婚によって結ばれる権利を未来永劫手に入れることができないという点にこそ存するのである。

かつては幼児の〈クレシチェーニエ крещение(洗礼)〉という儀式、つまり幼児を正教会へ帰属させるための儀式を通して結び合わされる、血縁関係にならない人々の関係がかなり大きな役割を担っていた。洗礼式に参列する男女、公式的名称によれば〈ヴォスプリヨームニク восприемники(洗礼盤から幼児を取り上げる人)〉は〈クレースヌィエ・ロヂーテリ крестные родители(洗礼親)〉、すなわち〈クレースヌィー・オテーツ крестный отец(洗礼父)〉、〈クレースナヤ・マーチ крестная мать(洗礼母)〉と呼ばれ、一方その幼児は生涯にわたって彼らの〈クレースニク крестник(洗礼子)〉、すなわち〈クレースヌィー・スィン крестный сын(洗礼息子)〉、〈クレースナヤ・ドーチ крестная дочь(洗礼娘)〉となったのである。日常生活において実の両親は洗礼親のことを〈クレースヌィエ・クウモーヴィヤ крестные кумовья(教父母)〉、すなわち〈クウム кум(教父)〉、〈クウマー кума(教母)〉と呼んでいた。「洗礼親」は、永遠にお互いが「宗教的親戚関係」として、つまり一種の近親者とし

て結ばれ続けた。このことから〈クウモーフストヴォ **кумстово**(教父母同士のつきあい)〉という言葉や、「私は彼(彼女)と一緒に子供を洗礼できない **мне с ним (ней) детей не крестить**」、つまり「我々赤の他人だ」という決まり文句が生まれることになったのである。

〈**Крестеэньи крестины**(洗礼式)〉と言えば、この儀式は「洗礼親」同士の結婚を、たとえ彼ら「洗礼父」と「洗礼母」の間にいかなる血縁関係がないとしても、永遠に禁じてもいた。

チェーホフの素描『不具者 **Калелка**』ではアニュータが兄に対し、兄がどうして洗礼父として招かれないかを説明している。その説明によれば、兄の思慕する娘は既に洗礼母として招待されているから、「とてもいい娘さんだけれど、もしも兄さんと彼女が教父母ということにでもなったら、二人は結婚できなくなっちゃうって話よ／**она девушка хорошая, а ели бы вы покумились, то, говорят, не стали бы вас венчать**」。

さらに洗礼父の娘、つまり〈**Крестеэньи・セстрэ крестовая сестра**(十字架の姉妹)〉と結婚することさえ禁じられていた。ゴーリキーのフォーマー・ゴルデーエフは、彼の洗礼父である商人マヤーキンの娘リュボーフィとの結婚を勧められている。金持ちで、抜け目のないマヤーキンは、その結婚を不可能だと考えておらず、こう言っている——「娘はお前さんの十字架の姉妹にあたるわけだが、それについてはこっちで何とかしてみせる／**А насчет того, что сестра она тебе крестова — обладим мы**」[『フォーマー・ゴルデーエフ』]。金銭と縁故関係だけが、こうした障害すべてを乗り切る手助けとなりえたのだった。

金銭もなければ縁故もないままに、たまたま「宗教的親戚関係」にあると分かった若い男女の間に燃え上がった恋は、悲劇へと暗転してしまわざるをえなかった。そうした悲劇的葛藤は、ブニンの短編『教母 **Кума**』に描かれている。そこでは主人公が洗礼式で教母に恋してしまうのである——「……いったいどういう風の吹き回しで彼ら(子供の両親)は他の誰でもない私たち二人を洗礼親として招く気になったのでしょうか……／**...не понимаю, какая нелегкая**

дернула их позвать крестить именно нас с вами...」。

こうした「違法の結婚」が判明した場合には、たとえそれが長年連れ添い、たくさんの子供に恵まれた夫婦であっても、ロシア帝国の法律に従って強制的に離婚させられるのが常であった。

ちなみにここで〈結婚適齢期 брачный возраст〉について述べておこう。ロシア古典文学作品を読んでいると、読者はそこに描かれているきわめて若い年齢での結婚に驚愕してしまう。ラヂーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅 Путешествия из Петербурга в Москву』中の一章『エドロヴォ Едрово』には、アニュータという娘が「10歳の青年」との結婚を斡旋される様子が描かれている。またプシキンの『オネーギン』では、タチヤーナの子守が13歳で嫁がせられているが、そのときの花婿ワーニャは彼女よりもさらに若いのである[3章18連]。18世紀の法律によれば、13歳の花嫁は許されていたにしても、花婿は15歳以上でなければならなかった。この法律は地主の持村では破られるのが常だった。子供の多い農家では少しでも早く娘を「厄介払いする」ことが喜ばれたし、一方子供の少ない花婿の家族ではそうした娘を労働力として必要としていたからである。こうした違反は、教会文献の中に紛れ込んだまま、忘れられてしまった幼児の洗礼登録簿を除けば、身分証明書というものなど存在しなかったから、日常茶飯事であった。司祭を説得したり、買収したりすることなど簡単なことだった。「私は数えの13で結婚したのよ／Я по тринадцатому году замуж шла」——オストロフスキーの喜劇『身内同士は後勘定 Свои люди — сочтемся』に登場する女中頭フォミニチナはそう言っている。

早婚は皇族でも行なわれていた。皇位継承者だったアレクサンドルI世は、16歳で14歳の女性と結婚させられている。しかも18世紀末にはそのような結婚は合法的と考えられていたのである。

『戦争と平和』の老伯爵ロストフは、[ナターシャに声楽を習わせるのは早過ぎるのではないかと言われ、いや早過ぎはしないと答えつつ]次のように問い返している——「我々の母親たちは12歳か13歳で嫁にいったではありませんか？／Как же

наши матери выходили в 12-13 лет замуж?»[1部1編9章]。

1830年に女性の結婚可能年齢を16歳まで、男性のそれを18歳まで引き上げる「勅令」が發布された。プウシキンは女性の結婚可能年齢をもっと引き下げべきだと考えていた——「15歳の娘は、我が国の風土にあっては既に結婚適齢期に達しており、農家という農家は女性の労働力を必要としているのである／15-летняя девка и в нашем климате уже на выдании, а крестьянские семейства нуждаются в работницах」[検閲のため生前未刊の論文『モスクワからペテルブルクへの旅 Путь из Москвы в Петербург』、4章「結婚 Браки」]。とはいいながら、この法律は革命にいたるまでずっと有効であった(現在のロシアにおける結婚可能年齢は、男女双方ともに18歳である)。

「洗礼親」の他に〈**ポサジョーヌイエ・ロデーテリ посаженные родители(仮親)**〉、すなわち〈**ポサジョーヌイー・オテーツ посажёный отец(仮父)**〉と〈**ポサジョーナヤ・マーチ посажёная мать(仮母)**〉もいた。彼らは婚礼の席上で花婿と花嫁の親代わりを務めた。結婚式が終われば、「仮親」はどのような法的責任も、道徳的責任も負う必要がなかった。マーシャ・トロエクロワ(プウシキン作『ドゥブロフスキー Дубровский』)は、結婚式へ仮母と一緒に出かけている。彼女を生んだ実の母親はこの時点で既に他界していたのであってみれば、それはごくあたりまえのことであつたろう。

「仮親」として招かれるのは通常、箔付けのための立派で社会的地位の高い人々か、あるいは家族との長い交友歴のある友人たちであつた。若い官吏のグルモフ(オストロフスキー作『猿も木から落ちる На всякого мудреца довольно простоты』)は、仮父として「非常に重要な人物」である將軍クルウチツキーを招いている。オストロフスキーの別の喜劇『裕福な許婚者たち Богатые невесты』では、下級官吏ピラミダロフが將軍グネヴィシヨフに対し、仮父を引き受けてくれるよう説得を試みている——「……私にとりましてもこれは何にもまして素晴らしい名誉でございますし、それに何と申しましても閣下、これは商人階級にとりましても重要この上ないことなのでございます／...и для меня эта честь выше всякой меры, да и по купечеству, вы

знаете, ваше превосходительство, как важно»。

『大尉の娘 Капитанская дочь』のプウガチョーフはグリニョーフに、彼をマリア・イワノーヴナと結婚させる約束をしながら、若い二人に特別な敬意を示す腹積もりでいる——「おそらく私が仮父を務めることになる／Пожалуй, я буду посажёным отцом」(7章)。

要職にある高官カレーニンもまた仮父として招待されている(トルストイ作『アンナ・カレーニナ』)。

4 節

看做し呼びかけ

Условные обращения

古典文学作品で「教父(クウム кумあるいはその指小形クウマニョーク куманек)、「教母(クウマー-кумаあるいはその指小形 クウームウシカ кумушка)」という呼びかけに出会ったとき、お互いにそう呼びあっている人々が必ずしも「洗礼親」だと考える必要はない。そうした呼びかけにとくに頻繁に出会うのはクルィローフの寓話においてであるが、そこではそうした呼びかけが動物たちのアレゴリカルな会話においてはもちろん(『トンボとアリ Стрекоза и муравей』、『狼と狐 Волк и лисица』等)、人間同士の会話の中にも頻繁に見受けられる。たとえばクルィローフの寓話『二人の百姓 Два мужика』は次のように始まる——「こんにちは、教父ファッデイ！／Здорово, кум Фаддей！」——「こんにちは、教父エゴール！／Здорово, кум Егор！」——「それで、友よ、調子はどうかね？／Ну, каково, приятель, поживаешь?」。多くの場合、これは旧知の間柄にある年配者同士の呼びかけなのである。「クウマー-кума(教母)」という語は、面と向かって話をする場合のみならず、相手が眼前にいない場合でも「プリーヤ-テリニツツア приятельница(女性の友人)」という語の代わりに使用された。たとえばプウシキンの詩『軽騎兵 Гусар』にその一例を見ることができる[9連]。

こうしたことを驚くにはあたらない。直系親族を指す用語ですらも、日常会話では今日にいたるまで、見知らぬ人々への呼びかけとして使われているからだ——「デドゥーリャ дедуля(爺ちゃん)」、「バブゥーリャとバブゥーシャ бабуля и бабуся(婆ちゃん)」、「パパーシャ папаша(パパちゃん)」、「ママーシャ мамаша(ママちゃん)」、「オテーツ отец(父上)」、「チャーデニカ дяденька(おじちゃん)」、「チョーテニカ тетенька(おばちゃん)」、「スイノーク сынок(坊や)」、「ドーチカ дочка(お嬢)」などである。かつては、これら以外にも「ブラーテツ братец(あんちゃん)」や「セストリーツア сестрица(ねえちゃん)」が、他人に対する呼びかけとして用いられていた。『死せる魂』ではノズドリョーフが馴れ馴れしくチチコフに「ブラート брат(兄さん)」と呼びかけているし、『検察官』ではフレスタコーフが居酒屋の下僕を親しげに「ブラーテツ братец(あんちゃん)」呼ばわりしている。またクルイローフの有名な寓話では、狐が鴉を次のようなお世辞を使って誘惑しようとしている——「もしもねえちゃん、ねえちゃんがだよ、／そんなに綺麗なうえに歌も天下一品ならば……／Что, ежели, сестрица, / При красоте такой и петь ты мастерица...」[『鴉と狐 Ворона и лисица』]。

5 節

消滅していく言葉

Отмирающие слова

第2章の幕開けを担ったのは、「マーマ мама(ママ)」と「パーパ папа(ママ)」という語であった。これら二語はあたかもペアのように見えるが、その履歴は異なっている。もし「ママ」という母親への呼びかけが古い、昔ながらのロシア語だとすれば、「パパ」はずっと遅れてロシア語に入ってきた語なのである。だとすれば、我々の遠い祖先は父親をいったいどう呼んでいたのだろうか。

昔ながらの父親への呼びかけは、〈チャーチャ тятя(おとう)〉、あるいは

〈チャーテニカ тятенька(おとつあん)〉 (ТЯТЯの愛称形)であった。ここでプウシキンの次の詩行を思い出さずにはいられない――

子供たちが百姓屋へ走ってきて、
息せき切って父親を呼んでいる――
おとう、おとう、うちの網に
死人がかかったよ！

Прибежали в избу дети,
Второпях зовут отца:
«Тятя, тятя, наши сети
Притащили мертвеца».

【『水死人。民話 Утопленник. Простонародная сказка』 1連1-4行】

ここで試しに「チャーチャ тятя(おとう)」を「パーпа папа(パパ)」に取り換えてみよう。そうするとすべてが台なしになり、わざとらしくて不自然な響きが得られることになるだろう。村の子供たちはいかなる「パパ」も知らず、彼らが知っていたのは「おとう」だけであった。「パパ」なる語は貴族がフランス語の「パパー papa」から借用してきたもので、その後商人や町人たちが「パーペニカ папенька(パパちゃん)」と話すようになり、かくして「パパ」は20世紀初頭までかかってやっとの思いであらゆる階層へと広く浸透していったのである。しかも即座に広まったのではなかった。「マーма мама(ママ)」という語の普及にもまたフランス語の「ママン maman」やドイツ語の「マーマ(ママー) Mama」の影響がなかったわけではないが、音としてはずっと以前から存在していたのであり、この場合は母語と外来語との一致が生じたと言うべきである。「マーチ мать(母上)」はまたしばしば〈マートウシカ матушка(おふくろさん)〉とも呼ばれ、「オテーツ отец(父上)」は〈バーチャ、バーチュシカ батя, батюшка(おやじさん)〉とも呼ばれていた。現在では「パパ」と「ママ」の指小形として「パーポチカ папочка(パパちゃん)」、「マーモチカ мамочка(ママちゃん)」が使用されているが、19世紀には今や廃語となったか、廃語となりつつある指小形――「パーペニカ папенька」、「マーメニカ

маменька」、「パパーシャ папаша」、「ママーシャ мамаша」——もまた人口に膾炙していたのである。

ゴーリキーの短編『悪魔の誘惑 Наваждение』では年寄りの商人が、娘が「パパーシャ папаша(パパちゃん)」、「ママーシャ мамаша(ママちゃん)」と口にするのを聞いて憤慨している(舞台は1890年代である)——「こうした言葉は何か奇妙奇天烈な非ロシア語で、昔はこんな言葉など耳にしなかったものだ／И слова эти какие-то уродливые, нерусские, в старину не слышно было таких」。ゴーリキーの長編『マトヴェイ・コジェミャーキンの生涯 Жизнь Матвея Кожемякина』ではマトヴェイ・コジェミャーキンが、ボーリャ少年の口から「チャーチャ тятя(おとう)」ではなく、「パーпа папа(パパ)」という語が発せられたのに驚いている——「うちでは子供たちが白パンをパパと呼んでいる／У нас папой ребятенки белый хлеб зовут」。そして実際の話、ダーリの辞書には、「フレープ、フレーベツ хлеб, хлебец(パン)」を意味する幼児語として、「パーпа папа」の指小形「パーпка папка」が登録されているのである。

ロシア古典文学のあちこちの頁で〈クウゼーン кузен= двоюродный брат/ троюродный брат(従兄弟、又従兄弟)〉、あるいは〈クウジーナ кузина= двоюродная сестра/ троюродная сестра(従姉妹、又従姉妹)〉という語に出会うことがしばしばある。フランス語由来のこれらの語は、インテリ貴族階層においてだけで使われていたのであって、庶民には無縁の、理解できないものであった。ロシアの古典作家たちはこれら二語を、ときとしてフランス語そのままにローマ字で綴るか[クウザーン cousin、クウズィーヌ cousine]、あるいはフランス語風にキリル文字で綴っていた。たとえばゴンチャローフの『断崖 Обрыв』では、「従兄弟」が「クウゼーン кузен」ではなく、「クウゼーニ кузень」と綴られている。また『オネーギン』のタチャーナ・ラーリナの母親は、モスクワに住む自分の「クウジーナ кузина(従姉妹)」であり、タチャーナの「チョートカ тётка(おばさん)」にあたるポリーナ(恐らくはプラスコーヴィヤの変名)のもとへと出かけていっている[プラスコーヴィヤ Прасковья

の愛称形は通常パラシャПараша、あるいはパーシャПашаだが、気取ってフランス語風にポリーナ Полина としているのだと思われる／『オネーギン』2章33連参照]。さらに『知恵の悲しみ Горе от ума』に出てくる公爵令嬢の一人は、「従兄弟が贈ってくれたマフラーはなんて素敵なんでしょう！／Какой эшарп cousin мне подарил!」と言っている(フランス語の「エシャルプ écharpe / эшарп(マフラー)」はほどなくロシア化し、お馴染みの語「シャルルフ шарф(マフラー)」に変わった)。そしてトルストイの短編『大惨事 Ходынка』では公爵令嬢ジーナが、「クウゼーン кузен(従兄弟)」のアレクセイとともに一般庶民の野外遊楽へ出かけていっている。

「クウゼーン кузен(従兄弟)」と「クウジーナ кузина(従姉妹)」の二語は、これまでにすっかり忘れ去られたわけではないが、今日ではその響きに気取った時代遅れの感があることは否めない。これら二語はかつて一度として一般庶民に受け入れられたことはなかったし、現代ではほとんど使われていないのが実情である。

血縁関係を示す用語の両極端に位置する語、すなわち片やあまりにも俗っぽく、とうに廃れてしまった風俗を想起させる「チャーチャ тятя(おとう)」、「チャーテニカ тятенька(おとっつあん)」と、片やあまりに異質で貴族的な「クウゼーン кузен(従兄弟)」、「クウジーナ кузина(従姉妹)」がともに死滅してしまったのは、実に興味深い現象である。

ロシア古典文学を読むとき読者はまた、〈**マームカ мамка(おっかあ)**〉が「**マーマ мама(ママ)**」の卑小形ではなく、まずは「**コルミーリツァ кормилица(乳母)**」を、続いて「**ヴォスピターテリニツァ воспитательница(保母)**」を意味していたこと(たとえばプウシキンの『ボリス・ゴドゥノーフ』における皇女クセーニヤの乳母)、それにまたたんに実父のみならず、司祭もまた〈**バーチュシカ батюшка(おやじさん)**〉と呼ばれる一方、実母のみならず、司祭の妻もまた〈**マートウシカ матушка(おふくろさん)**〉と呼ばれていたということも考慮しなければならない。さらに農民はしばしば領主や領主夫人をも「**バーチュシカ(おやじさん)**」、「**マートウシカ(おふくろさん)**」と呼んでいた

のである。

6 節

近親者や友人同士の呼びかけ

Обращение между близкими и друзьями

概して人と人との呼びかけの形式は、さらには近親者同士の呼びかけの形式でさえも、現在とはかなり異なっていた。年令、官位、社会的地位における下位者から上位者に対する場合には、ひととき丁寧な言葉遣いが要求されていた。年令、官位、社会的地位における上位者から下位者に対する呼びかけには、なにがしか横柄な言葉遣いが許されていた。こうした事態は既に家族から始まっていた。

貴族や官吏、または商人の家庭において、子供は両親を始め、年上の親類全員に対して、「**ВЫ** (あなた)」でしか呼びかけることができなかった。一方田舎の農家では、ピョートル大帝治世下に導入された年配者や見知らぬ人に対する呼びかけ「**ВЫ** (あなた)」はなかなか浸透せず、結局根付かずに終わってしまった。その代わり特権階級の間では、とりわけ都市部においては、この呼びかけは広く人口に膾炙していったのである。

貴族階級の家庭では、夫婦ですらお互いに「**ВЫ** (あなた)」と呼び合っていた。たとえばレールモントフの『仮面舞踏会 Маскарад』ではアルベニンとニーナが、またオストロエフスキーの『実入りのいい役職 Доходное место』ではヴィシネフスキー夫妻が、互いに互いを「**ВЫ**」と呼びながら話をしている。またトゥルゲーネフの長編『その前夜 Накануне』のニコライ・アルテミエヴィチは、「妻にはいつも『あなた』で話したが、娘には非常事態の場合だけ『あなた』を使った／*всегда говорил жене «ВЫ», дочери — в экстраординарных случаях*」[30章]。

地方の貴族たちにとっては、夫婦間で「**ВЫ** (あなた)」を使用することなどめったになかった。だから、昔気質の地主夫婦が「**ВЫ**」を使用する

場面を描くゴゴリの筆致に、温かなアイロニーが込められているのも故なきことではないのである。

同年代の友人同士の呼びかけはきわめて注目に値する。そこでは現代においても自然な「Ты(君)」という呼びかけが用いられるとともに、互いにフルネームで、あるいは苗字でさえ呼びかけ合っていたのである。エヴゲニー・オネーギンとヴラヂーミル・レンスキーの会話から聞こえてくるのは、彼らの苗字だけである。彼ら若い二人の貴族は、互いにフルネームで呼び合うこともできたはずだとしても、「ジェーニャ」や「ヴォロージャ」といった愛称形のことなど想像だにできなかつたのである[ジェーニャЖеняはエヴゲニー-Евгенийの、ヴォロージャВолодяはヴラヂーミル-Владимирの愛称形]。『父と子 Отцы и дети』のバザーロフとキルサーノフはお互いにエヴゲニー、アルカーヂーとファースト・ネームで呼び合っているのに対し、バザーロフの両親は息子のことを「エヴゲーシヤЕвгеша」と愛称で呼んでいる。概してファースト・ネームの愛称形が教養ある家庭へと、とくにその大人の世界へと浸透していったのは、即座のことでもなければ、一挙のことでもなかつた。ロストフ家のナターシヤとペーテニカは、家庭内では「ナターシヤ」、「ペーテニカ」と呼ばれていても[ナターシヤНаташаはナターリヤ-Натальяの、ペーチャПетяはピョートル-Пётрの愛称形]、一歩世間に出ればそうした愛称形の使用は避けられているのである[『戦争と平和』]。トゥルゲーネフは『処女地 Новь』の中で、シピャーギンは妻をワーリヤと呼び、妻は夫たる彼をボーリヤと呼んでいるが[ワーリヤВаляはワレンチーナ-Валентинаの、ボーリヤБоряはボリス-Борисの愛称形]、それは二人きりである場合に限られ、世間はそうした馴れ馴れしさに耐えられなかつたということを強調している[26章]。

対等な者同士が苗字で呼び合うのは、かなり一般的なことだった。プウシキンの『スペードの女王 Пиковая дама』に登場する賭博者たちは、互いに苗字で呼び合っている。[また『知恵の悲しみ』では]ソフィアがチャツキーを、[『オネーギン』では]タチャーナがオネーギンを、それぞれ苗字で呼んでいる。

トゥルゲーネフの『父と子』に出てくる自由主義思想の持主クウクシナに

は、「初めて知り合ったその日から男性を苗字で呼ぶという、田舎やモスクワの貴婦人たちの多くに特有な習慣があった／привычка, свойственная многим провинциальным и московским дамам, с первого дня знакомства звать мужчин по фамилиям.」[13章]。チャーホフが描くオリガ・イワノヴナは、「いつも夫を、知り合いの男性全員と同じように、名前ではなく苗字で呼んでいた всегда звала мужа, как всех знакомых мужчин, не по имени, а по фамилии.」[『浮気な女 Попрыгунья』(1892) 7章]。

7 節

公式的呼びかけと半公式的呼びかけ

Официальные и полуофициальные обращения

あまり知らない者同士や赤の他人同士の呼びかけ表現は、その多様性において抜きん出ている。もっとも慇懃で公式的とされた呼びかけ表現は、男性に対する〈ミーロスチヴィー・ゴスウダーリ милостивый государь(慈悲深きお方=貴方さま)〉と女性に対する〈ミーロスチワヤ・ゴスウダールィニヤ милостивая государыня(慈悲深きお方=貴女さま)〉であった。この定型表現には非常に厳格で冷たいニュアンスがあった。知人同士であっても、相互の関係が突然冷え切ってしまうか、緊張状態に陥ったときには、この定型表現で会話の口火が切られるのだった。公官庁の書類もまたこの定型の呼びかけで始められるのが常であった。

ダーリはその有名な辞書に、次のようなバリエーションとグラデーションを記載している — 「我々の祖先は目上の者に対しては『ミーロスチヴィー・ゴスウダーリ(貴殿)』、同等の者に対しては『ミーロスチヴィー・ゴスウダーリ・モーイ(貴兄)』、目下の者に対しては『ゴスウダーリ・モーイ(貴君)』と書いていた／Отцы наши писали к высшему: милостивый государь, к равному — милостивый государь мой, к низшему — государь мой」。

俗語においては「ミーロスチヴィー・ゴスウダーリ」と「ミーロスチワヤ・

フェドシューク 古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科(その3)(鈴木淳一・阿部昌子・神田良平)

「ゴスウダールィニャ」という呼びかけの定型表現はいたる所で簡素化され、**〈ゴスウダーリ государь〉**と**〈ゴスダールィニャ государыня〉**となり、その後さらに第一音節が省略されて**〈スウダリ сударь〉**と**〈スウダールィニャ сударыня〉**となるのだが、この最後の形が大抵は面識のない富裕な人々や教養ある人々に対するもっともポピュラーな呼びかけ表現となったのであった。

文官は言うに及ばず武官の職場においても、官位や爵位の低い者は高い者に対し、その肩書きに応じて**〈ヴァーシェ・ブラゴローヂエ ваше благородие (誉あるお方/貴殿)〉**から**〈ヴァーシェ・ヴィソコпревосходительство(いと気高きお方/大閣下)〉**までのどれかを使って呼びかけることが要求されていた(6章の「文官官等表」と7章の「武官官等表」を参照のこと)¹。また皇族に対しては**〈ヴァーシェ・ヴィソーチェストヴォ ваше высочество(位高きお方/殿下)〉**、あるいは**〈ヴァーシェ・ヴェリーチェストヴォ ваше величество(偉大なるお方/陛下)〉**と呼びかけなければならなかった。皇帝と皇后には**〈Императорское величество(国を統べる偉大なるお方/皇帝陛下)〉**という公式称号があった。大公、つまり皇帝および皇后の近親者たちには**〈Императорское высочество(国を統べる位高きお方/皇帝殿下)〉**という称号が与えられていた。

この場合「Императорское(皇帝の)」という形容詞はしばしば省略されたが、「ヴェリーチェストヴォ величество(陛下)」と「ヴィソーチェストヴォ высочество(殿下)」との混同が生じるとすれば、それはた

¹ 詳細は本書6-7章の訳出時に譲るとして、等級と敬称の関係について簡単に触れておくと、次のようである。1-2等官—「ヴィソコпревосходительство(いと気高きお方/大閣下)」、3-4等官—「превосходительство(気高きお方/閣下)」、5等官—「Ви́соко́родие(いと敬うべきお方/尊下)」、6-8等官—「Ви́соко́бра́го́родие(いと誉あるお方/貴下)」、9-14等官—「Благо́родие(誉あるお方/貴殿)」。

だ誤解のなせる技でしかなかった。たとえばトルストイの長編『戦争と平和』では、アウステルリッツの会戦を前にしてアレクサンドル I 世を探し回るニコライ・ロストフが、途中で出会ったボリス・トルゥベツコーイに「どこへ? ты куда?」と訊かれ、「任務で陛下のところまで/К его величеству с поручением」と答えている。「『ほら、あそこにいらっしゃる』——そうボリスは言った。彼には、ロストフに必要なのは『陛下』ではなく、『殿下』だと聞こえたのだ。彼はロストフに大公を指し示した/«Вот он!» — сказал Борис, которому слышалось, что Ростову нужно было «его высочество», вместо «его величества». И он указал ему на великого князя...」(1部3編17章)。

皇族に属さない公爵、それに伯爵には(その妻や未婚の娘も含めて)〈ヴァーシェ・シャーテリストヴォ ваше сиятельство(輝かしいお方)〉、また最高位の公爵には〈ヴァーシャ・スヴェートロスチ ваша светлость(光眩きお方)〉という敬称が使われた。公式的には妻はいつでも夫と同じ敬称で呼ばれた。チェルヌィシェフスキーの『何をすべきか Что делать?』では、ヴェーラ・パーヴロヴナの父親が四等文官の未亡人である下宿の女将に対し、一言毎に「ヴァーシェ・プレヴォスホデーテリストヴォ ваше превосходительство(気高きお方/閣下)」と呼びかけている。また女中はアンナ・カレーニナに対し、彼女の夫に対する場合と同様に、「気高きお方/閣下」という称号を用いている。

職場で高位の者が部下に対して呼びかける場合は、苗字か官位、あるいは役職名に〈ゴスポデーン господин(さん)〉を加えるのが常だった。自分と社会的地位の等しい公爵や伯爵、男爵に呼びかける場合は、正式な敬称は省かれ、たんに爵位だけが使用された(とりわけ非公式な状況ではそうだった)。『戦争と平和』のロストフ伯爵夫人でさえも自分の夫に対し、「ねえ、伯爵/послушай, граф」と話しかけている。またトゥゴウホフスカヤ公爵夫人は、彼女の夫がチャツキーのところへ出かけようとしたとき、「公爵、公爵! お戻りになって!/Князь, князь! Назад!」と叫んでいる[『知恵の悲しみ』]。

プウシキンの『その一発 Выстрел』では、主人公シリヴィオが伯爵と伯爵

夫人へ爵位だけで呼びかけているのに対し、語り手はと言えば、「地位の格差」ゆえに、伯爵夫妻に対しては家庭内においてさえも「ヴァーシェ・シヤーテリストヴォ ваше сиятельство(輝かしいお方)」と呼びかけており、伯爵夫人に「伯爵夫人 графиня」と呼びかけるのはたったの一回きりである。

現代ではこうしたニュアンスのどれひとつとして耳目を引くことなどないが、以前はこうしたニュアンスのすべてが、登場人物や彼らの対人関係の評価において少なからぬ役割を果たしていたのである。

職場においては皇帝の官僚たちが、社会全体を貫徹するヒエラルキーを形式的側面から強化していた呼びかけの規則を、遺漏なく遵守せんと腐心していたのである。

定型の呼びかけ表現を頻繁に用いることは、生き生きとした会話を重々しくも理解困難なものとした。『大尉の娘 Капитанская дочь』では、グリニョーフが自分の逮捕の理由を騎兵曹長に尋ねると、曹長はこう答えている——「分かりかねます、ヴァーシェ・ブラゴローヂエ[誉あるお方=グリニョーフ少尉]……ただエヴォー・ヴィソコブラゴローヂエ[いと誉れあるお方=少佐]からヴァーシェ・ブラゴローヂエ[誉あるお方=グリニョーフ]を監獄にお連れし、またエヨー・ブラゴローヂエ[誉あるお方=グリニョーフ夫人]をばエヴォー・ヴィソコブラゴローヂエ[いと誉れあるお方=少佐]のところへお連れするようにとの命令があったのです、ヴァーシェ・ブラゴローヂエ[誉あるお方=グリニョーフ]/Не могу знать, ваше благородие... Только его высокоблагородие приказал ваше брагородие отвезти в острог, а её брагородие приказано привести к его высокоблагородию, ваше брагородие。」[13章]。ここにはパロディーが——忠実な古参兵の形式上は完璧な「教本通りの言葉 уставный язык」に対する歴然たるパロディーが——込められている。

8 節

スローヴォ・エル・ス

Слово-ер-с

会話の中で頻繁に「スウーダリ сударь(貴方さま)」を繰り返し用いることは、相手に対する尊敬の念を示すためであった。ここからかの有名な「スローヴォ・エル・ス слово-ер-с」が生まれることになった。革命以前の文学に登場する人物たちの会話にはこの「スローヴォ・エル・ス」が、すなわち「スウーダリ сударь(貴方さま)」の省略形である「ス c」を伴った言葉が溢れ返っている。

どうしてこの「ス c」が「スローヴォ・エル・ス Слово-ер-с」と呼ばれることになったのだろうか？ 古代スラヴ語のアルファベットでは、「ア—a」は「ア—ズ аз」、「ベ—б」は「ブウキ буки」といった風に、文字一つ一つに名称がついていた。こうしてロシア語のアルファベットは、最初の二文字を取って「ア—ズブウカ азбука」と呼ばれることになったのである。「ス c」の名称は「スローヴォ слово」であり、硬子音の後につける文字「ъ」は「エル ер」呼ばれていたのだが、最後の「c」はもう一度念押し的に「スローヴォ・エル・ス」の由来を、つまり「ス c」が「スウーダリ сударь」という敬称を一音にまで圧縮したものであることを想起させるものだったのである。

かつて「スローヴォ・エル・ス」は貴族の会話においても、何はさておき年長者に対する尊敬の表現として、広く使用されていた。近隣地主たちとのつきあいにおいて若いエヴゲニー・オネーギンが傲然と自立的に振舞っている様子を伝えてくれるものの一つは、彼が「スローヴォ・エル・ス」を使わないということである。そのために彼は地方の地主たちに無知で無分別な人間と決めつけられ、非難される——「いつも『はい』と『いいえ』だけで、『はい、貴方さま』とも、／『いいえ、貴方さま』とも言いやせぬ／*Всё да да нет; не скажет да-с / Иль нет-с*」[2章5連]。それに引き換え慇懃なモルチャーリンの場合、その口から「スローヴォ・エル・ス」が姿を消すことはない。そこでは

しょっちゅう「はい、貴方さま／да-с」、「小生はですね、貴方さま／я-с」、「我らのおりますこちらの方へ、貴方さま／к нам сюда-с」等々といった表現が顔を覗かせるのである。ファムウソフですら、スカロズップに取り入ろうとして、「スローヴォ・エル・ス」を使っているのである[『知恵の悲しみ』]。

「スローヴォ・エル・ス」は——それはときとして「スローヴォ・エーリク・ス слово-ерик-с」とも呼ばれたが——、古い貴族たちの考えでは古来の、すなわち家父長的な生活や年長者への敬愛といった「よき伝統の数々 добрые традиции」が保持されていることを証するものであった。トゥルゲーネフの『処女地』では、農奴制を擁護する保守主義者のカルロメイツェフがこう言っている——「スローヴォ・エーリク・スが滅びるとともに、あらゆる尊敬の念も、目上に対する敬意というものも滅んでしまったのだ！／Слово-ерик-с пропало, и вместе с ним всякое уважение и чиновничество!」[25章]。

しかし「スローヴォ・エル・ス」は完全に廃れてしまったわけではなく、ただたんに教養ある貴族たちの会話から姿を消し、商人や町人階級、下級官吏や下僕の世界へ移行していっただけのことに過ぎなかった。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟 Братья Карамазовы』では、虐げられ、打ちのめされた二等大尉スネギリョーフが自己紹介しつつ、こう言っている——「スネギリョーフではなく、むしろ二等大尉スローヴォエルソフと名乗る方がよろしいかと存じます。と申しますのも人生が半分過ぎましてからはもう、ただただスローヴォ・エル・スをつけて話すようになりましたものですから。屈辱の中でスローヴォ・エル・スが身に染み込んでしまったのですな／Скорее бы надо сказать: штабс-капитан Словоерсов, а не Снегирёв, ибо лишь с второй половины жизни стал говорить словоерсами. Слово-ер-с приобретается в унижении」[4編6章]。

読者はプッシュキンの『スペードの女王』6章のエピグラフを覚えておられるだろうか——

「『ストップ!』

『我輩に向かって「ストップ」などとほざいていいのか?』

『ヴァーシェ・プレヴォスホヂーテリストヴォ(気高きお方/閣下)、小生は「どうぞストップを、貴方さま」と申し上げたのです』

—Атанде!

—Как вы смели мне сказать *атанде*?

—Ваше превосходительство, я сказал *атанде-с!*」。

カード・ゲームの席上で交わされたこの会話は、現代人に多くのことを教えてくれる。第一に「ストップ атанде」とはカード・ゲーム用語であり、「お待ちください、まずは小生がカードを切ります подождите, ход сначала сделаю я」という意味であること[атандеはフランス語 attendre の命令形 attendez をロシア語綴りしたもの]。そして第二に「スローヴォ・エル・ス」をつけずにただ「ストップ атанде」とだけ言うのはおそらく、「ちょっと待ってください подождите」が一語だけ発せられる場合と同様、いくぶん粗野な響きを与えるものだったに違いなく、そのために目下のゲーム参加者が「プレヴォスホヂーテリストヴォ превосходительство(気高きお方/閣下)」に対して、すなわち将軍に対して、謝意を表明せざるを得なくなっているということである。

「スローヴォ・エル・ス」をただひたすら相手に対する尊敬の念を示す表現とだけ考えるのは不当であろう。19世紀末になるとインテリ男性の間では、控え目に使われていた「スローヴォ・エル・ス」が感情表現を強める手段として、ときにはアイローのこもったある種の公的性格を伝える目印として機能するようになっていく。たとえばチェーホフの『ワーニャおじさん Дядя Ваня』に出てくるアストロフ医師は、同等の立場にあるヴォイニツキーに「スローヴォ・エル・ス」をつけて話している。チェーホフでは『三人姉妹』のソリョーヌイも、そしてその他多くの作品の登場人物たちもまた、自らを卑下する態度とは一切無縁に「スローヴォ・エル・ス」を使っているのである。

ひととき興味を引くのは、『罪と罰』におけるラスコーリニコフへの心理学的に繊細かつ周到に構築された訊問である。取調べを進めるポルフィーリー・ペトローヴィチは、被疑者とのやり取りに信憑性と半ば公的な性格を与えようとして、しばしば「スローヴォ・エル・ス」を用いる。一方ラスコーリニコフ

は対等な立場にはないにもかかわらず、「スローヴォ・エル・ス」を一度として用いることはない。「あなたが殺されたのですよ、貴方さまが Вы и убили-с」——とポルフィーリー・ペトロヴィチは、あたかも「スローヴォ・エル・ス」によってその場の緊張をやわらげるかのように、落ち着いた、おもねるような調子で会話を締め括っている[6編2章]。

布告によって官等、階級、およびそれらにまつわる称号を廃止した1917年の10月革命とともに、「スローヴォ・エル・ス」もまた自然に、いかなる勅令を待つまでもなく消滅した。ただ革命後しばらくの間、古参の教授や学者、医者たちの会話では、「ヌウ・ス ну-с(さてと、貴方さま)」、「ダー・ス да-с(まったくですね、貴方さま)」、「ヴォート・ス вот-с(こういうことですよ、貴方さま)」、「ターク・ス так-с(つまりですね、貴方さま)」といった職業語の一部として残っていたが、それは会話に卑下の態度を付加するのではまったくなく、ある種の重みや尊大さを付加するものであるかのようにだった。

9 節

その他の呼びかけ表現

Иные формы обращения

学もなく財もない人にとって、ときに複雑で発音の難しい様々な呼びかけの定型表現に通曉することは大変なことだった。したがって官等や階級の違いを知らない一般庶民は、地主や貴族といった特権階級の人々に対してただたんに〈パーリン барин(ご主人さま)〉、〈パールィニャ барыня(ご内儀さま)〉、「バーチュシカ батюшка(おやじさん)」、「マートウシカ матушка(おふくろさん)」、「スウダグリ сударь(貴方さま)」、「スウダールィニャ сударыня(貴女さま)」と呼びかけ、その娘たちには〈パールィシニャ барышня(お嬢さん)〉、息子たちには〈スウダーリク сударик(お坊ちゃん)〉と呼びかけていた。

学も財もない人々の特権階級に対するもっとも敬った呼びかけ表現は、相手の官等にかかわらず〈ヴァーシェ・ブラゴローヂェ ваше благородие(誉ある

お方／貴殿)〉であった。

どうしても相手の地位、官等に応じた呼び方をしなければならない場合には、複雑な言葉はしばしば歪曲されるか、縮めて発音されることになった。たとえば「ヴィソコロージェエ высокородие(いと敬うべきお方)」、あるいは「ヴィソコブラゴロージェエ высокоблагородие(いと誉れあるお方)」はくスコローヂエ скородие)と発音されたが、陰ではもちろん嘲笑を込めてくスコヴォローヂエ сковородие(フライパン殿)と発音されていた[「スコヴォローヂエ сковородие」は「スコヴォロートカ сковородка(フライパン)」を連想させる]。トルストイの短編『地主の朝 Утро помещика』では、百姓たちがネフリュードフ公爵を「ヴァーシェ・シヤーテリストヴォ вешее сиятельство(輝けるお方)」と呼ぶ代わりに、たんにくヴァーシャソ васясо)と呼んでいる。「ヴァーシャソ」はときにくヴァーシャシ васясь)とも発音された。日常的でほぼ普遍的と言ってよい特権階級への呼びかけ表現として、くヴァーシェストヴォ вашество(御大将)というのもあるが、これはつまり「これで礼は尽しましたよ。それをどんな敬称と受け取るかはそちらさま任せ」ということである。

ゴーリキーの『どん底 На дне』に出てくるサーチンは、カード・ゲームでそのインチキが露見した男爵に「ヴァーシェ・ヴァーシェストヴォ ваше вешество(御大将)」と呼びかけているが、これはもはや嘲笑以外の何ものでもない。つまり彼は男爵に対し、今は詐欺師に落ちぶれてはいても、かつてはお偉い貴族だったということを思い知らせようとしているのである。

トルストイに目を転じれば、『コサック Казаки』を始めあれこれの作品で、兵士たちが重々しく長たらしい「ヴァーシェ・ブラゴロージェエ ваше благородие(誉あるお方)」や「ヴァーシェ・ヴィソコブラゴロージェエ ваше высокоблагородие(いと誉れあるお方)」とは言わずに、簡略化した形のくヴァーシェ・ブローヂエ ваше бродие)とか、くヴァーシ・ブローチ ваш-бродь)ときえ口になっているのを耳にすることができる。

注意深い読者なら当然、こう問いたくなるであろう——教養程度の低い人々の口の端にしばしば上るくヴァーシャ・ミーロスチ ваша милость(慈悲深き

お方)〉 や 〈ヴァーシェ・ステペーンストヴォ ваше степенство(位高きお方)〉 はいったい誰に向けられたものなのか、と。

これらの呼びかけはともに、どんな規定規約にも載っていない非公式的なものである。「ヴァーシャ・ミーロスチ」は大概、地主貴族や上司に対して用いられていた。たとえばゴーゴリの『検察官 Ревизор』では、フレスタコーフのところへやってきた商人たちが市長に対する苦情をこう切り出している——「ヴァーシャ・ミーロスチ(慈悲深きお方)、どうぞよろしくお願い申し上げます/Бъём челом вашей милости」。またトルストイの『復活 Воскресение』では、老農夫が地主に「ヴァーシャ・ミーロスチ」と呼びかけている。

「ヴァーシェ・ステペーンストヴォ」は通常、商人に対して用いられていた。たとえばオストロフスキーの『真もいいが福はもっとよい Правда хорошо, а счастье лучше』では、屋敷番のグロズノフが主人の商人にそう呼びかけているし、またゴーリキーの作品では、演奏によって「治療しよう」とやってきたラッパ吹きがブウルィチョーフにそう呼びかけている[『エゴール・ブウルィチョーフとその他の人々 Егор Булычов и другие』(1931)]。こうした場合に「ヴァーシャ・チェースチ ваша честь(名誉あるお方)」を使うことはめったになかった。

ロシアの風俗習慣に通暁していたレスコフは論文『門地門閥にうんざり Пресыщение знатностью』で、封筒の上書きについてこう指摘している——「商人宛の書簡では、『エヴォー・チェースチ(名誉あるお方)』、『エヴォー・ミーロスチ(慈悲深きお方)』、『エヴォー・ステペーンストヴォ(位高きお方)』と書くのが一般的だが、『エヴォー・ヴィソコステペーンストヴォ(いと位高きお方)』とさえ書く場合もある。また商人に『食い扶持』を願う際には『ヴィソкопрево́сходительство(いと気高きお方)』が用いられている/Пушут купцам: «его чести», «его милости», «его степенству» и даже пишут «его высокостепенству», а когда просят от них «корму», тогда титулуют их «высокопревосходительством»」。

それに対して特権階級の人々が下々の者たちを呼ぶ場合には、とくに農民を

呼ぶときには、相手を軽蔑し軽んじ切った形式、すなわち名前だけが、しかもその卑小形だけが用いられた。給仕を呼び寄せるときには〈**チェロヴェーク человек(お前)**〉が使われたが、口を開かず歯と歯の間越しに発音されたために「**チェラエーク челаэк**」と聞こえるのだった。

トゥルゲーネフの短編『二人の地主 Два помещика』[『獵人日記』所収]では、マルダリー・アポローノヴィチが召使たちを「ミーシカ! ユーシカ! Мишка! Юшка!」と呼んでいる。だがユーシカが何者かといえば、「背が高く、痩せぎすの、80前後の老人/высокий и худощавый старик лет восьмидесяти」なのである。

ベリンスキーは、ゴゴリの『友人たちとの往復書簡抜粋 Выбранные места из переписки с друзьями』を俎上に載せた有名な手紙の中で[『新暦1847年7月15日付のゴゴリへの手紙 Письмо к Н. В. Гоголю 15 июля н. с. 1847 г.』(1847)]、ニコライ I 世治世下のロシアについて怒りと苦々しさを込めて、「人間が人間を売買する/где люди торгуют людьми」国、「人々が名前ではなく、ワーニカ、スチョープカ、ワーシカ、パラシカ等々といった綽名で呼び合っている/где люди сами себя называют не именами, а кличками: Ваньками, Стёпками, Васьками, Палашками」国として描いている[ВанькаはИван、СтёпкаはСтепан、ВаськаはВасилий、ПалашкаはПалладийの卑小形]。当時こうした名称はすべて、あからさまに相手を貶めるニュアンスを帯びた卑小形だったのである。

こうした卑小の「綽名」は、農奴制の廃止後もずっと生き残り続けた。ショーロホフの『静かなドン Тихий Дон』には、リスニツキーの領地で働く馬丁のサーシカが出てくる——「その老人は長生きしたが、いくつになってもサーシカと呼ばれ続けた。誰一人として彼を父称を呼ぶことで甘やかしたりはしなかった。彼の苗字など、サーシカが20年以上も奉公してきた老リスニツキー自身にさえ分からなかったに違いない/До сплошных седи́н дожил старик, но Сашкой так и остался. Никто не баловал его отчеством, а фамилии, наверное, не знал и сам старый Листницкий, у которого жил

フェドシューク 古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科(その3)(鈴木淳一・阿部昌子・神田良平)

Сашка больше двадцати лет」[1部2編14章]。

古典作家の作品を読んでいると、ほとんど一頁毎に、もはや忘れ去られてしまった、あるいは半分忘れかけられている血縁関係用語や多種多様な呼びかけ表現に出くわすことになるが、こうしたデテールについてもまた十分な注意が払われてしかるべきであろう。